

もくじ

二世文一と文中 1P 千住の百万遍(後) 3P

足立史談

第602号

2018年4月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

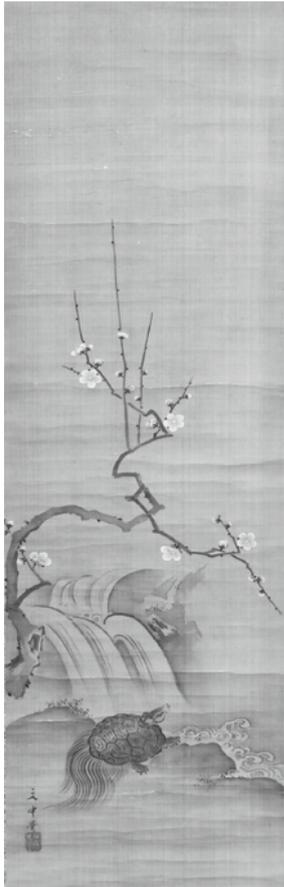
〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(30-308)



谷文中 《福祿寿・松鶴・梅亀図》
江戸時代後期～明治初期 絹本着色 三幅 当館蔵



文化遺産調査企画展「谷文晁と二人の文一」より

二世文一と文中 — 谷家の系譜をつないだ兄弟 —

当館学芸員 小林 優

三月六日(火)から五月十三日(日)

にかけて、郷土博物館では、江戸時代後期の絵師谷文晁と、その養嗣子である一世文一、さらにその長男の二世文一という、谷家三代にわたる画業と系譜を検証した文化遺産調査企画画展「谷文晁と二人の文一」を開催しています。文晁と二世文一は、文化十二年(一八一五)の千住酒合戦に賓客として招かれるなど、千住の地と人に親しみましたが、それに続く二世文一もまた、文晁の門下でもある上沼田村(現足立区江北)の豪農船津文測と深く親交していたことが文測の家に伝来した作品・資料から明らかになっています。

今回はこの二世文一と、その弟で文晁から続く谷家の継承者となった谷文中(たにぶんちゆう)の足跡についてご紹介します。

■二世文一・文中に至る谷家の系譜

関東文人の大御所として、画壇と文人社会に大きな影響力を持った谷文晁(一七六三～一八四〇)ですが、その身分立場はあくまで祖父の谷本教(たにもとのり)、父の谷麓谷(たにろくこく)と続く田安徳川家の家臣でした。天明八年(一七八八)、

父に続いて二十六歳で奥詰見習いとして田安藩へ出仕をはじめ、その四年後には、田安宗武の子で白川藩主・幕府老中首座の松平定信の近習となります。もっぱら画事によって定信に任せ、その文化活動に貢献していた文晁は、文化六年(一八〇九)に父麓谷が没したことにより家督を継承し、谷家の当主となりました。

この家督継承以前、文晁は宮津藩医利光澹斎(としみつ たんさい)の息子で、早くから文晁門下で画才を見せていた文一郎(二世文一、一七八七～一八一八)を娘お宣の婿に迎えていましたが、文政元年、一世文一は権太郎(二世文二)、啓次郎(文中)の二人の息子を残して三十二歳で逝去し、文晁の後継者となることは叶いませんでした。

跡継ぎの最有力であった一世文一を喪った文晁ですが、お宣の母、幹々(かんかん)の没後に娶った阿佐子との間に三男四女を設けており、田安藩士谷家の家督は、一世文一の長男権太郎(二世文一)ではなく、文晁・阿佐子の実子である文二(ぶんじ、一八一二～一八五〇)が継承しました。しかし、この文二もまた文晁が没して十年後の嘉永三年に三十九歳

で亡くなり、続いて十一歳で家督を継いだ文二の長男文五郎も慶応三年（一八六七）に二十八歳という若さで早世し、谷家は立て続けに当主を早く喪うこととなりました。文二や文五郎の兄弟たちがこの時どのような状況にあったかは定かではありませんが、二世文一は既に一世文一の実父利光澹齋以来の縁もあつてか、宮津藩に出仕しており、文五郎の没後、谷家の家督は二世文一の弟、すなわち一世文一の次男である啓次郎（文中）が引き継ぐこととなりました。絵師の一族として名を馳せた谷家の系譜は最終的に、宮津で画業を繋いだ二世文一と、その弟の文中という一世文一の遺児たちによって、幕末から明治の時代の転換期を越えて繋がることとなったのです。

では以降、この二世文一と文中の兄弟について顧みていきます。

■宮津藩士、二世文一

二世文一は先述の通り初名を権太郎といい、絵師としてはじめ文権、続いて文逸と号した後、天保初年、二十歳前後に父の号を継承して文一を名乗ったと考えられます。その生年について、文晁の末弟子である野村文紹が著した『写山楼の記』に収録された谷家の家系図では文化十一年（一八一四）とされています。二世文一が埋葬された丹後宮津の大頂寺過去帳の明治十年（一八七七）十月三十一日の没時で「六十四年一ヶ月」という記録の逆算から、あるいは文

化十年生まれともされますが、いずれにせよ、父一世文一と死別したのは五、六歳の幼少時であり、以降二世文一は祖父文晁の指導のもと画道を深め、田安藩士谷家の家督を文二、文五郎が継承していく傍ら、自身は給人格御次詰として丹後宮津藩に出仕し、万延元年（一八六〇）には遣米使節団の一員としてアメリカに渡るといふ稀有な経歴を歩むに至ります。

この二世文一の事跡を語る記録・著述としては、幾つかの逸話を収めた『写山楼の記』中の「二世文一の日記『菜庵雜記』」、そして日本画家の結城素明が、宮津で活動した絵師の佐藤正持を論じる中で二世文一についても紹介している『勤王画家佐藤正持』（弘文社、一九四四年）の三つが主だった資料と言えます。

「二世文一の記」は、その人柄を示す逸話が主ですが、「同人洋行を久々志願なる所、先年初てアメリカ出張の官吏に付て出帆なし、先支那に上陸なし、彼地の者に應接なしけるに、一人の支那人、是が文晁の孫なるかとしたしく曰けるよし」と、二世文一の遣米使節団随従についても触れています。一方で『菜庵雜記』は、嘉永二（安政元年（一八四九）一八五四）にかけて綴られた文晁の日記であり、その中には頻繁に二世文一が文晁の屋敷に訪れて逗留したことが記録されています。特に嘉永四年（一八五一）末から五年半ばに

かけては、およそ一月に一回のペースで文晁宅へ逗留しており、二世文一と文晁との親交の程が窺えます。また嘉永五年六月十三日の記述には「谷文一朝来丹後宮津出立之趣来十六日頃」とあり、この頃には二世文一が宮津藩士として江戸と宮津とを行き来していたことを物語っています。

『勤王画家佐藤正持』では、宮津での二世文一の足跡が論じられています。著者の結城素明は、その中で前述の大頂寺過去帳からの二世文一の生年や、二世文一の妻が明治二十九年に没していること、さらに娘のひさが独身のまま明治四十四年（一九一）に四十六歳で没したことでその家系が廃絶したことを述べています。そしてまた、佐藤正持を含めた宮津藩主と二世文一の親しい間柄についても検証しています。二世文一は維新後に旧藩主本庄宗武が発行した『謝海新聞』に挿絵や表紙絵を描いています。この内容はそれに至る宮津での二世文一の立ち位置を物語ると言えます。

今後、これらの記録・記述を精査していくことで、二世文一の活動と画作をより明らかにしていくことが出来るでしょう。

■谷家の継承者、文中

これらの記録が残る二世文一に対し、文二の息子文五郎の後に谷家の家督を継いだ弟の文中（一八一七〜七六？）の足跡を語る記録は必

ずしも多くありません。『写山楼の記』中の家系図に付された記述によれば、文中は初名を啓次郎といい、一世文一が没する前年の文化十四年（一八一七）に生まれ、「文五郎依早世跡目相續」すなわち文五郎が早世したことによりその家督を相続することとなったと記されています。

文中もまた、二世文一と同様、早期から写山楼で文晁の教えを受けて画道に入っていたと見られ、野村文紹が天保初年頃の写山楼の様子を描いた『写山楼の記』中の一図「天保初年中写山楼上日々客之図」では、文二と共に作画を行う文中が描かれています。当館では、前頁上部掲載の三幅対《福祿寿・松鶴・梅亀図》を所蔵していますが、この他、東京国立博物館所蔵の《谷文晁像》、三遊亭円朝の幽霊画コレクションを保管する全生庵所蔵の《幽霊図》、板橋区立美術館所蔵の対幅《梅下双鶏図》など、必ずしも多数ではないもののその作例は現在にも伝わっています。しかし、絵師として文中の名が公に登場するのは文中四十七歳、文久三年（一八六三）の『文久文雅人名録』が初出であり、あるいは幕末期という状況が影響していることも考えられますが、絵師としての地歩を得たのは必ずしも早くなかったと推測されます。

とは言え、文二、文五郎亡き後、文中に対する谷家後継者という認識は文晁一門に連なる人々に浸透していたものと考えられ、慶應元年

(一八六五)、文晁の二十七回忌法要を兼ねて「文晁谷先生追福遺墨展観会」が、佐竹永海らが会幹となって源空寺を会場に行われた際には、二世文一が加わらない中、文中が会主を務めています。果たしてこの会が文中の発案であったかは定かではないものの、宮津藩士として画業を繋いだ兄二世文一に対し、文中が谷家の当主として、江戸東京を舞台に文晁以来の一門の繋がりの中で活動していたことは確かでしょう。

この後、文中は明治九年(一八七六)頃に没したとされます。その後、の系譜関係は不詳ですが、文測の船津家に伝わる、書簡や記録には昭和八年(一九三三)頃には谷文造という人物が谷家の当主となっており、船津家を訪れたことが記述されています。谷家の系譜は、文中の後も着実に繋がれていったのです。

文晁・二世文一に続く二世文一、文中兄弟への調査は、未だ端緒に入ったばかりです。今後の検証によって、足立との関係も含め、その活動はより明らかになっていくことでしょう。

※本稿執筆にあたり、結城素明著『勤王画佐藤正持』については「谷文晁と二人の文一」で指導頂いた玉蟲敏子氏と、同氏を通じて早稲田大学教授、成澤勝嗣氏より情報をお寄せ頂きました。ここに記し、御礼申し上げます。

千住の百万遍(後) 永野家資料から

萩原 ちとせ

■千住二丁目百万遍の歴史 後半は、千住二丁目での百万遍の歴史や内容について説明している。それによると以下のような内容や決まりとなっている。

○元禄期に始められ、二十人を講中仲間とした。

○仲間内に病死人が出た場合は、互いに世話をし、埋葬の穴掘り野辺送りなど懇ろに執り行い、元日、五節句、大晦日、祝いの月や日に関わらず当たる。

○病死人、病で親類や身寄りの者も立ち寄らない時は、なおさら篤く世話をし、講中の仲間内は互いに親切に立ち寄り世話をするように確認する。

○講銭は月に二十四文ずつ掛けて、香典は錢一貫弍百文ずつ講銭のうちから出す。

○年忌法事の際は、花料として錢二百文ずつ仏前に供える。

○葬式が重なり香典が不足の場合、はその時々、それぞれが出金する。

○野辺送りに参加しない、月掛け講銭を滞納するなどのことがあれば講から除名する。

○前書きの通り、一回で相談取り決め、人が入れ替わりのときは、そのときの世話人が説明し、昔からのしきたりが崩れないように取りはからい、念仏講中が永続するようにする。

○講銭の残りがでた場合は、講中の諸道具を購入しておき、百万遍の修業に差し支えがないようにし、講が消滅しないように、一同が心がけ、念仏修業を怠ることがないようにする。

■未文 終盤は、念仏講のご利益と、帳面成立の顛末がまとめられている。

現世では家門繁栄、病気・災難・悪魔の調伏、福徳円満子孫長久、後世は、極楽浄土で仏菩薩と同一の蓮華台上に往生することが間違いないとする。

月日が経ってしまい、帳面が大きくなり破れ文字などわからなくなってしまうため、帳面を新しくして、前から伝えていた文面をそのまま写して置いて、後の世の見聞として永野政重が再興しておくものである。以上として、記年と署名がある。

嘉永四次星夷稔八月再興 永野政重写

述べられている講の決まりごとの内容を見ると、その役割は、穴掘りや、棺を担いでゆく野辺送りなど、葬儀の実務や、講員の家族の年忌法

要についてのことである。念仏功德と修行のためというより、講中内の葬儀の役割を担うことであり、実際に講中の家族、先祖の供養を願うものであることがわかる。

区内の農村部においては、ズシ(村組)のなかで、組合とよばれる葬儀の際の相互扶助を行う仲間が近隣の数軒で組まれているのが一般的である。集落によって、念仏講や百万遍念仏を行う講中が存在するところもあるが、葬式の実働をする組合とは同一ではない。念仏を行う講は、通夜や、葬儀に引き続き法事に喪家に集まり、念仏をあげることが役割であり、穴掘りや野辺送りといった実際の葬儀に関わる役割は組合の行うものとなっているのである。また、百万遍念仏や念仏講は女性だけで構成されているところも多い。

葬儀社が出現するまで、千住の町のなかで、葬儀の実務をどのように行っていたのか不明であるが、千住二丁目の二十軒では、この百万遍念仏講中が互いの葬儀での実務を行うものとしていたことがわかる。

このように、葬儀法要に関わるものが主で、定例に行事として行っている様子はうかがえない。しかし、講員二十軒分の年忌法要を行うことなどを考えれば、かなりの頻度で行われたことが想像できる。

講道具の目録 次に続くのは講の

道具の目録である。表題に講中持とあるので、これらが講の共有物であることがわかる。

念仏講中持百万遍諸道具目録

十三仏画像	巻幅
大数珠	巻連
小數珠	巻連
伏鉦	巻座
敲鉦	巻釣
撞木	式撲
数取箱	巻貝
五具足	巻貝
膳椀	式拾人前
茶碗	式拾人前
念仏講大帳	巻冊
メ拾巻品	

千住二丁目内

念仏講中連名

十三仏画像は「巻幅」とあるので、掛軸である。人が亡くなつてからの四十九日までの七日ごと、百か日、一週忌、三回忌、一三回忌、一七回忌、二十三回忌、三十三回忌と十三の法要を守護する本尊を描いたもので、法要の際に掛けられるものである。あとに挙げられている五具足とは、華瓶(けびょう)一対、燭台一対、香炉一基の仏前に飾る道具一組のことである。十三仏の掛軸を本尊として掛け、中央に香炉を、その両側に燭台、さらに花瓶に花を挿して飾り、百万遍念仏を行ったことがわかる。

数珠は、講員が輪になつて、手練り回すことのできる大きなもので、大数珠、小數珠ともに一連とあるの、大型なものとは小型なものがあるというのであろう。参加する人数や場所の広さによって使用を分けるのか、あるいは小數珠は先達を持つような個人用の数珠を指す可能性もある。鉦は鉦吾(しようご)とよばれる念仏や御詠歌をするときに調子をとるために叩く鉦で、伏鉦は、座敷に置いて叩く鉦で、敲鉦(たたきがね)は、「巻釣」とあることから、鉦にある耳に紐を通して、木製の台などに吊るして叩くものと思われる。撞木(しゅもく)は、T字型になつている棒で、鉦を叩いて音を出す道具である。



押部百万遍の数取り 右側は撞木

職人が作り購入されるものではなく、決まった形や形式はなく、それぞれの講中が作ったものである。念仏の回数の数え方も、その講中の間で伝承に違いが生まれている。数珠ひとつひとつの粒(一顆)を手で繰ると念仏を唱えたことになり、大数珠が一回りする、数珠の顆数に、念仏を唱える講員の人数を掛けた回数が増えられたことになる。一〇八〇顆の数珠であれば、20人で一回を二万六千回と数える。また、数珠が一回りすることで、一万と数え、千回回して百万とするとところもある。一般的に、一連の数珠のなかに房や大珠があり、こちらが回つてくると、それを押し頂いたり、また、回すときの目安にもなる。

区内で数取りが残されているのは、鹿浜の阿弥陀院(七一一九七)で行われている押部の百万遍であるが、ここでは箱のなかに、「十万」とかかれた木札が取り付けられており、これを横に指でスライドさせて数えるようになっていいる。「十万」の木札十枚が三列となつている。一列で百万回となり、三列動かして三百万となる。

もちろん百万遍念仏とは、厳密に百万回を唱えるのではなく、また、大勢で唱える念仏は、その人数分の回数として考える考え方があり、多人数でなるべく多く念仏を唱えるこ

とに功德があるということを示している。

二十人前の膳椀と茶碗が揃えられており、年忌法要などで百万遍念仏をしたあとは、こうした食器を使って飲食を行う慣例であったことがわかる。そして、この念仏講大帳を講の諸道具のひとつとしている。

■講の世話人 最後に、講の世話人を務めた人物を年代ごとに記している。寛政より文化年間、文化より文政年間、天保より嘉永年間それぞれ、三名ずつの世話人の名前が記載されている。年代は概ねであり、講の諸道具の記載とともに、永野政重が嘉永四年時に、思い出して遡って記しているものと考えられる。永野氏自身が、世話人の記録も必要と判断したのであろう。

■町とムラの違い 千住の百万遍念仏講中は葬儀の実務を行う講であり、農村部の葬儀の互助や念仏講とは異なる働きをしていたことがわかった。その違いが出てくる理由は、町と村組での構成員の違いによるものなのではないかと想像するが、百万遍念仏講中の結成が千住二丁目だけなのかを始め、住民互助で行う葬儀や百万遍念仏の伝承が千住で途絶えている現在、それを探ることは容易ではない。今後も情報収集していきたい。

(当館学芸員) 終